

富山県大門町

# 二口油免遺跡B地区発掘調査報告

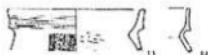
—二口土地区画整理事業に伴う発掘調査報告—

1999年3月

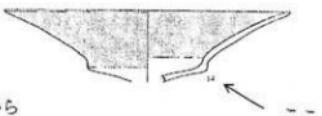
(株)中部日本鉱業研究所  
大門町教育委員会

## 訂 正 表

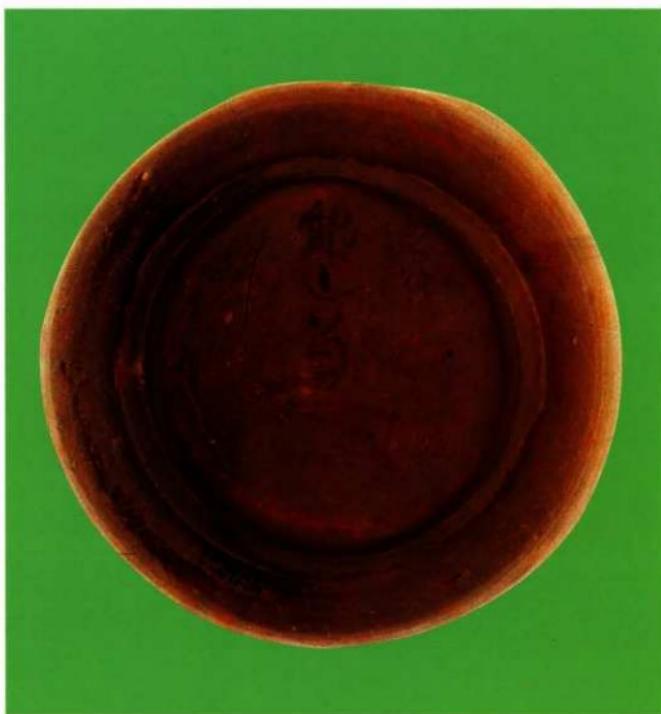
1. 27ページの図版1で高杯の杯部片の実測図  
番号『14』を → 『15』に訂正



2. 41ページの写真図版11弥生時代の遺物で上から  
二段目右端の遺物番号『15』を → 『35』に訂正



3. 42ページの抄録で副書名が『二口土地区画整理に事業に伴う発掘調査報告』を  
→ 『二口土地区画整理事業に伴う発掘調査報告』に訂正



墨書土器

## 序

二口油免遺跡は平成5年度に県営圃場整備事業に伴う試掘調査で確認された遺跡です。平成8年度には大門町二口土地区画整理事業に伴う試掘調査で遺跡範囲の拡大が確認されました。事業範囲約12,200m<sup>2</sup>の広大な面積において保存が不可能であったため、翌9年度より記録保存を目的として本調査を実施してきました。

調査地は平成12年度に行なわれる第55回国民体育大会相撲競技場に選定されており、早期に当該地の整備を完了することが必要なため、本年度は一部について徳中部日本鉄業研究所の協力を得て調査を実施しました。発掘調査では弥生時代後期や奈良・平安時代の遺構・遺物が検出され、この地には非常に長い間に渡って人々が生活していたことを示していました。

この報告書は、その成果が地域の歴史の理解や文化財の保護意識の高揚に寄与できることを願ってまとめたものであります。

資料としてご活用頂けたら幸いに思います。  
最後になりましたが、調査にあたり寛大なご理解と多大なご協力を頂きました大門町二口土地整理組合事務所、同組合員の皆様に心より感謝申し上げます。

平成11年3月

大門町教育委員会

## 例　　言

- 一、本書は富山県射水郡大門町に所在する二口油免跡B地区の発掘調査報告書である。
- 一、調査は二口土地区画整理事業に伴う本調査である。
- 一、調査は二口土地区画整理組合の委託を受け、大門町教育委員会の指導・協力のもと㈱中部日本鉱業研究所が実施した。
- 一、調査は平成10年6月1日から10月21日までの期間行なわれた。(実働日数87日)
- 一、調査面積は3,500m<sup>2</sup>である。
- 一、調査は㈱中部日本鉱業研究所・真鍋　治が担当した。
- 一、本書の執筆分担は以下のとおりである。
- 「調査に至る経緯」 尾野寺 克実　　「調査に至る経緯」以外真鍋　治
- 一、本書は大門町教育委員会の監修のもと㈱中部日本鉱業研究所が編集した。
- 一、調査、および本書の作成にあたっては以下の方々の御教示、御協力をいただいた。(敬称略・順不同)
- 橋本 国夫　久々 忠義　山口 晨一　川崎 覚　鈴木 景二　田中 明
- 一、現場調査にあたっては㈱大門町シルバー人材センターの御協力をいただいた。
- 一、遺物の整理にあたっては㈱中部日本鉱業研究所の以下の者が参加した。
- 和田 久代　岩瀬 三幸　大謀 麻起子　渡辺 貴世子
- 一、出土品・記録資料については大門町教育委員会が保管している。

## 凡　　例

- 一、遺構の表記については掘立柱建物はSB、溝はSD、土塁はSKとし、その後に通し番号を付した。
- 一、調査時の測量には国土地理院平面直角座標第Ⅳ区系を用いた。方位は座標北である。
- 一、本文中のグリッドは平成9年度の大門町教育委員会で使用したもの拡大であり、東西にアルファベット、南北に数字で表わす。杭の数字はX,Yの数値である。
- 一、本文中、

は赤彩部分を示す。

は地山を示す。

## 目　　次

卷頭カラー（墨書き器）	III 調査結果	挿　図
序文	1. 遺構について	遺跡の位置 ..... 2
例言・凡例	(1)弥生時代 ..... 6	調査の範囲 ..... 4
	(2)奈良・平安時代 ..... 11	基本層図 ..... 5
	2. 遺物について	SD06・SD06'・SD10・層図(40分の1) ..... 6
本文	(1)弥生時代 ..... 17	全体遺構図(200分の1) ..... 7
I 遺跡の概要	(2)奈良・平安時代 ..... 19	南側遺構図(100分の1) ..... 9
1. 位置と自然環境 ..... 1	IV まとめ ..... 23	SK11・SK12・層図(40分の1) ..... 10
2. 近辺の地形、地質 ..... 1	図　版	SP044・層図(40分の1) ..... 11
3. 周辺の遺跡 ..... 3	弥生時代 ..... 27	SB1・SB2・層図(100分の1) ..... 11
II 調査の概要	奈良・平安時代 ..... 29	SB3・層図(100分の1) ..... 12
1. 調査に至る経緯 ..... 3	写真図版	北側各立ち込み部遺構図(100分の1) ..... 13
2. 調査の経過 ..... 4	遺構 ..... 31	SK04・層図(40分の1) ..... 15
3. 基本層序 ..... 5	遺物 ..... 38	SK14・層図(40分の1) ..... 16

## I 遺跡の概要

### 1. 位置と自然環境

遺跡の立地する大門町は富山県の西を流れる庄川と、中央部を流れる神通川に挟まれた射水平野の南西部に位置する。

行政区画としては北に大島町及び、その向こうに富山湾に臨んだ新湊市が控え、西は庄川を渡って高岡市域になり、東は南の丘陵地帯を含んで小杉町となっている。

町の地勢はその西端を庄川、中央部を和田川が貫流し、南部には洪積台地や河岸段丘及び扇状地が広がり、当遺跡はそれに続く沖積平野の平坦地にある。

### 2. 近辺の地形、地質

遺跡の西、約1kmのところには庄川の流れがある。庄川は古来、西寄りに流れていたものを近世になって現在の方向に付け替えられた。したがって、大きくはその洪水等によって形成された地形であるが、個々には周囲の和田川や旧神楽川による直接的な影響を受け、自然堤防の微高地と湿地帯の織りなすところであったと想像される。遺跡の西から北東にかけては現在も用水路が走っているが、隣接区の調査では旧用水路および自然河川の流路跡が検出されている。

遺跡の標高は7m前後であるが、地下水位が高く、それから約50cmの深さで浸透層に達する。ボーリングによる地質調査では地下約20mまでは砂及び、泥質の互層になっており、比較的緩やかな流れの堆積を裏づける。



遺跡の位置 (S = 1 / 50,000)



### 3. 周辺の遺跡

周辺にはかなりの遺跡が存在している。二口油免遺跡より南の射水丘陵に近いところでは国史跡御田新遺跡や布日沢、小泉遺跡など縄文時代の遺跡があり、近辺のやや標高の低いところでは縄文時代の遺物は散発的に見られるものの、弥生時代から中世にかけての遺跡が中心である。

当遺跡の北東には縄文海進から古代にかけて、潟湖である放生津潟の海水面及び湖沼が射水丘陵近くまで広がっていたと思われ、その方面においての遺跡数は少ないが、その湖岸に近いところでは古代の墨書き土器などが出土した北高木・荒畠遺跡がある。

なお、北北西 7 km余りの伏木台地には越中国府跡があり、また、それとの関連においても指摘の多い須恵器窯・瓦工房跡のある国史跡小杉丸山遺跡が南 3.5 kmに位置している。

## II 調査の概要

### 1. 調査に至たる経緯

平成 7 年、大門町二口地内において、土地区画整理事業が実施されることになった。事業対象面積が 18.1 ha と広大であり、周知の埋蔵文化財包蔵地が隣接しているところから平成 7 年 12 月 8 日、大門町教育委員会は富山県埋蔵文化財センターの協力を得て分布調査を実施した。結果、隣接する周知の埋蔵文化財包蔵地の範囲が拡大する可能性が高いと考えられたため、大門町二口土地区画整理組合と大門町教育委員会で協議をもち、事業対象地内の試掘分布調査を実施することになった。平成 8 年度に行なった試掘調査の結果、大門中学校西側の 12,200m<sup>2</sup>で埋蔵文化財が確認された。

そこで、二口土地区画整理組合と町教育委員会で再度協議を行ない、平成 9 年度より年次的に本調査を実施する運びとなった。平成 9 年度は町教育委員会が調査主体となり、4,000m<sup>2</sup>を実施した。

調査対象地は平成 12 年度の第 55 回国民体育大会相撲競技会場の隣接地であり、町教育委員会で残り 8,200 m<sup>2</sup>の本調査を実施完了することが困難であったため、二口土地区画整理組合と町教育委員会は三度協議をもち、残りの範囲を民間調査団体に委託して全ての調査を平成 10 年度中に完了させるという結論に至った。平成 10 年 5 月 22 日、二口土地区画整理組合と㈱中部日本鉱業研究所及び、町教育委員会は 3 者で委託契約を締結し、町教育委員会の監督、指導のもと㈱中部日本鉱業研究所が調査を実施することになった。

## 2. 調査の経過

6月1日より本調査を開始する。

6月8日までバックホーにより表土(現代耕作土)を掘削する。その結果、調査区北側に近現代の落ち込みを確認する。(以下、本文中「北側落ち込み部」と呼ぶ)

6月9日より3日間、(株)中部日本鉱業研究所地盤調査部により国土座標によるグリッドの設定を行ない、10m間隔で杭を打つ。

調査の工程の便宜上、調査区の北端から北側落ち込み部まで、中央微高地、中央微低地から南端までの3つのブロックに分割し、北から1ブロックごとに遺構面の検出と遺構掘削の作業を繰り返していくことにする。

まず、北端から北側落ち込み部にかけてトレンチを南北に設定し、断面観察を試みた結果、3、4本の流路及び、その周囲に遺物を包含する黒色粘質土の広がりを確認する。また、北側落ち込み部に遺構面が2枚存在することを確認して平面掘削、遺構面の検出を慎重に行なう。

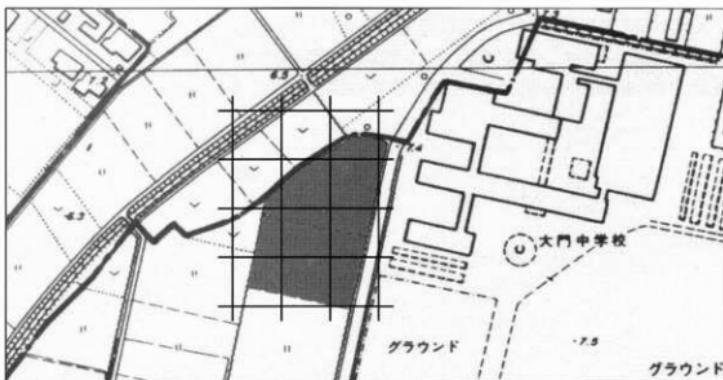
6月19日からは引き続き各溝の遺構掘りを行なう。北側落ち込み部の最も北よりの溝(S D01)からはかなりの数の杯及び、完形の壺などが出土する。

7月14日からは調査区中央部の調査にかかり、遺構掘削を行い完了するが、7月下旬からの長雨のため、調査区北端から東西15および14のグリッドラインまでの全掘写真が8月25日までずれこむ。

8月6日からは中央微低地から南端にかけての遺構の検出、掘削作業にかかる。10月5日、SK14よりほぼ完形の土師器甕や須恵器杯(墨書き土器)が出土する。

天候は9月に入っても雨模様が続き、作業は予想外に遅れて10月13日、2回目の航空測量を繰り終える。その後北側落ち込み部のS D01を地山まで掘り下げ確認及び、発掘区の周りの土層断面の記録作業を行ない、10月21日、現場調査を終える。

調査の範囲



### 3. 基本層序

基本層図

- ① 灰褐色シルト質土
- ② 茶褐色シルト質土
- ③ 暗褐色粘質土(酸化鉄分沈着)
- ④ 灰黒色茶褐色粘質土
- ⑤ 黒色粘質土
- ⑥ 暗灰褐色粘質シルト
- ⑦ 灰オリーブ色砂質土
- ⑧ 黒色泥炭層

①	5~10cm
②	5~10
③	5~15
④	5~10
⑤	5~20
⑥	10~20
⑦	20~40
⑧	5~10

1・2層は耕作土であるが2層からは遺物が出土する。3層は中央微高地の遺構の埋土としてまた、発掘区南東部分にも広く堆積している。場所によって灰黒色粘質土であったりもする。耕作土の浅いところでは事実上床土となっている。古代の包含層と思われる。4層は弥生末期の遺物が出土する。北側大溝及び発掘区全体を東西に貫く溝に埋土として堆積している。5層は北側大溝のなかだけに分布する。酸化鉄の沈着が著しい。6層は地山層でよく締まったシルトおよび細粒砂層で発掘区全体を覆っている。

### III 調査の結果

#### 1. 道構について

S D01, S D06についてはふたつの溝が切り合っており、古い方を S D01', S D06' とし、新しい方を S D01, S D06とした。

##### (1) 弥生時代

###### S D01'

T～Y-16～17で検出した溝。幅1.2～3.1m。深さ30～40cm。覆土は灰褐色砂質及びシルト～灰色砂質土が入り、S D01によって切られている。遺物は弥生土器が出土している。

###### S D06'

R～W-12～17で検出した溝。幅1.1～1.5m。深さ40～55cm。覆土は大きく2層に分けられ、上は灰褐色粘質土、下は暗灰色粘質土で下部は砂混じりになる。遺物は灰褐色粘質土から弥生土器が出土している。後から造られたS D06に切られている。

###### S D13

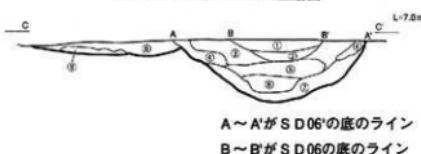
S-U-11～12

で検出した溝。溝の長さは6.5mほど。幅は20～50cm。深さは10～20cm。

S K13とはつながっていない。覆土

はS D14と同じではあるがS D13の方がややバサついた感じの灰色がかかったものである。遺物は赤彩した高杯の杯部分、有段口縁などの弥生土器が出土している。

S D06・S D06'・S D10土層図



D-D'

① 赤シルト(中性)

② 灰褐色土

③ 暗灰色シルト(酸化鉄分濃)

④ 灰褐色粘土

⑤ 灰褐色土(下部砂質)

⑥ 灰褐色シルト

C-C'

① 赤シルト

② 灰褐色粘土

③ 灰褐色シルト(酸化鉄分濃)

④ 灰褐色粘土

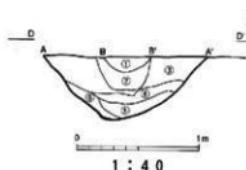
⑤ 灰褐色土(酸化鉄分濃)

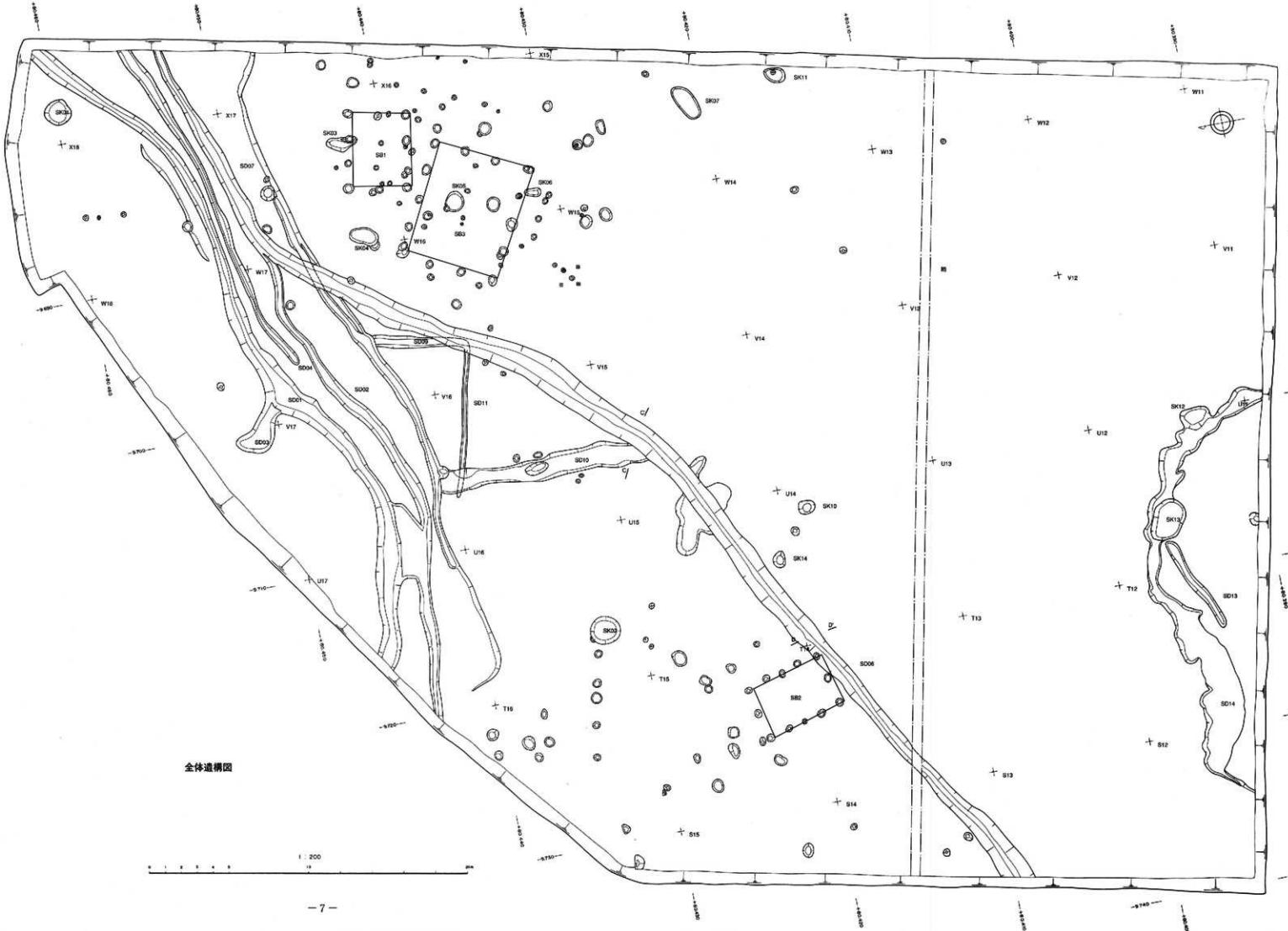
⑥ 灰褐色シルト

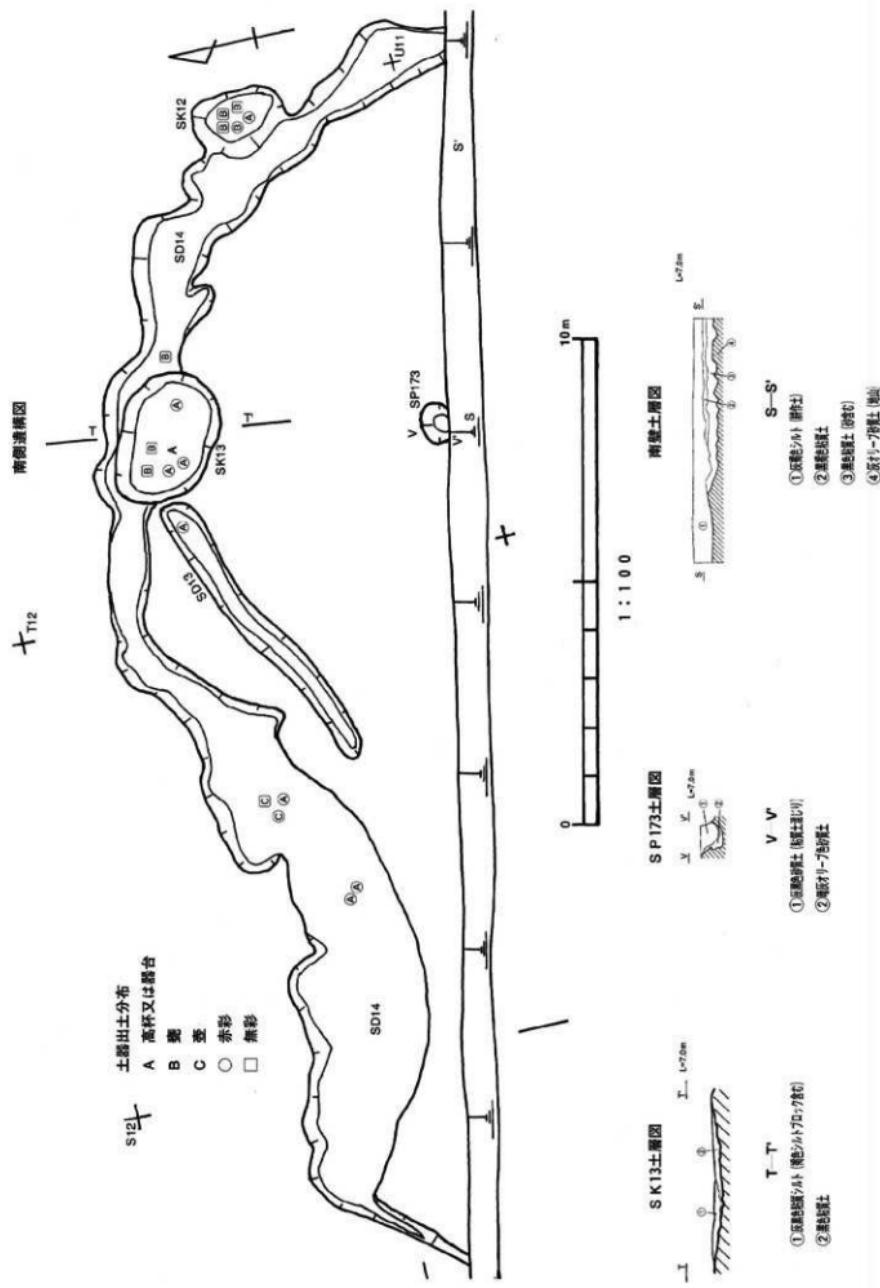
⑦ 灰褐色土(酸化鉄分濃)

⑧ 灰褐色シルト

⑨ 灰褐色シルト







#### SD14

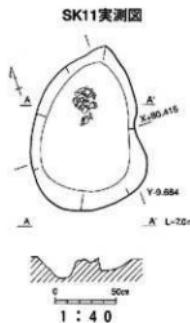
R～V-11～12で検出した溝。幅は50cmから広いところで2.0mとひらきが大きい。深さは20～30cm、浅いところでは数cmの深さしかない。全体の形は半ドーナツ状で、隣接調査区にも同じ形状に溝が断片的に残っている。地山のレベルが一番低い溝の中心からドーナツ状の中心に向かって盛り上がっているが、その落差は40cmほどである。覆土は単層で保濕性の強い黒色粘質土が入る。弥生末期の土器と思われる赤彩の壺、甕、高杯、器台が出土している。

#### SK03

W-X-16～17で検出された土壙。長径1.9m、短径は東西方向で90cm。深さは25～30cm程。覆土は単層で保濕性の弱い灰黒色粘質土に褐色粘質土ブロックの入ったものをシャベルで半分ほどのレベルまで取り除いたところで土壙の南東にかかるS P073を検出した。遺物は細かい碎片になったものが多いが、弥生土器の口縁部片の出土や他に4分の1に割れた花崗岩の表面を磨いた礫が2点出土した。

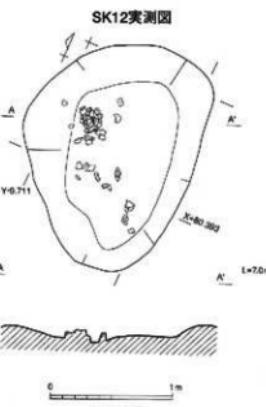
#### SK11

W-X-13～14で検出された土壙。長軸は北北東で1.4m、短径90cmの楕円形を呈する。深さは10～20cmほどである。覆土は灰黒色粘質土であるが、SK07と同じく、やや擾乱を受けている。遺物は土器師壺の胴部下半部が潰れた状態で底部より出土している。



#### SK12

T-U-11～12で検出した土壙。SD14の溝のなかで南東部に位置する。幅1.2m。長さ1.9mの楕円形に近い。深さは中心で22cm程。覆土は黒色粘質土が入る。



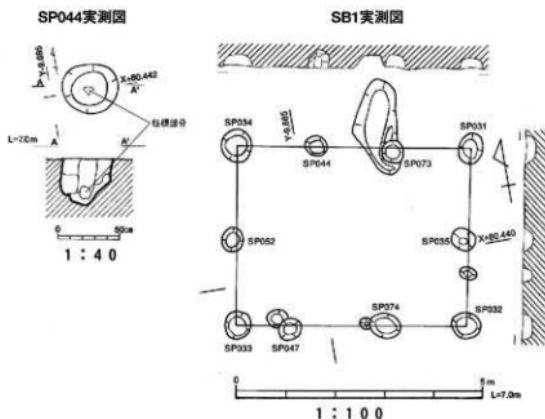
#### SK13

T-Y-11～12で検出された土壙。SD14の中央付近にある。幅は1.9m、長さは2.8mの東西に長軸をとった楕円形に近い形である。深さは中心でも20cmほどで底は皿状の形をなしている。覆土は2層に分かれ、上層は灰黒色粘質土で、下層はやや粘質度の強い黒色土である。遺物は高杯の脚部片や擬凹線文の入った壺の口縁部が出土している。赤彩を施してあるものが多い。

(2)奈良・平安時代

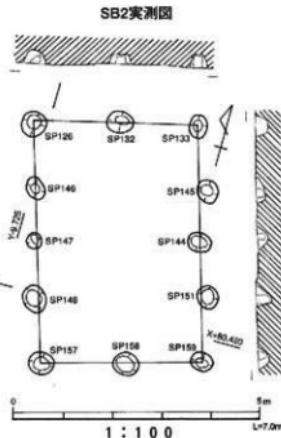
**SB1**

W～X-16～17で検出された掘立柱建物遺構。S P 034, S P 031の桁間は4.67m(2間半)。S P 033, S P 032の桁間は4.5m(2間半)。S P 034, S P 033の梁間は3.65m(2間)。S P 031, S P 032の間の梁間は3.62m。掘形は円形である。主軸は西北西になる。SP044, SP047, SP074に柱痕が確認でき、特にS P 044から柱根と見られる木片が出土している。覆土は基本的には灰黒色粘質土である。



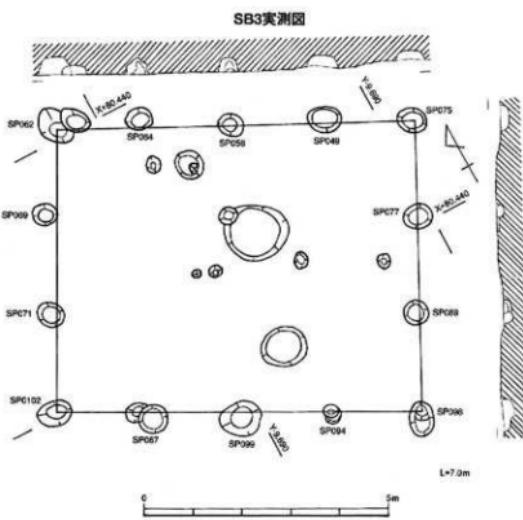
**SB2**

S～T-13～15で検出された掘立柱建物遺構。S P 126, S P 157の桁間は4.85m(2間半)。S P 133, S P 159の桁間は4.75m(2間半)。S P 126とS P 133の梁間で3.35m(2間)。S P 157とS P 159の梁間で3.17m(2間)。掘形は円形である。主軸は北北西である。柱痕はS P 132, S P 133, S P 144, S P 145, S P 151, S P 157, S P 158で確認できた。覆土はS B1, S B3と同じく灰黒色粘質土及び、灰オリーブ色砂質土の混じったもの。遺物は出土しなかった。



### S B3

V～X-15～16で検出された掘立柱建物遺構。S P075, S P062の梁間は7.3m(4間)。S P075, S P098の梁間は5.2m(3間)。S P062, S P102の梁間は5.8m(3間)。主軸は北西である。掘形は円形。覆土は基本的に灰黒色土である。S P056, S P064, S P067, S P069, S P077, S P102で柱痕が確認できた。S P056, S P077, S P089, S P099より奈良時代の遺物が出土している。



### S D01

T～Y-16～18で検出された溝。幅は0.7m～1.7m。深さ33～55cm。北側落ち込み部の北の縁に沿って両端がやや北向きの弧を描くように反っている。土層断面でみると弥生末期の溝が一度埋まった後、溝を掘り直した痕跡が見える。覆土は上部・下部ともに粘質土であるが、上部は粘質性が強く、下部は砂粒が多く混じる。遺物は須恵器杯などがS D03と交差するあたりで多く出土している。

### S D02

T～Y-16～17で検出された溝。北側落ち込み部の中央を走る溝で、幅は50～80cm。深さは10～20cm。西の端から東へ23mのあたりでS D07に合流する。覆土は黒色粘質土である。遺物は土師質土器が出土している。

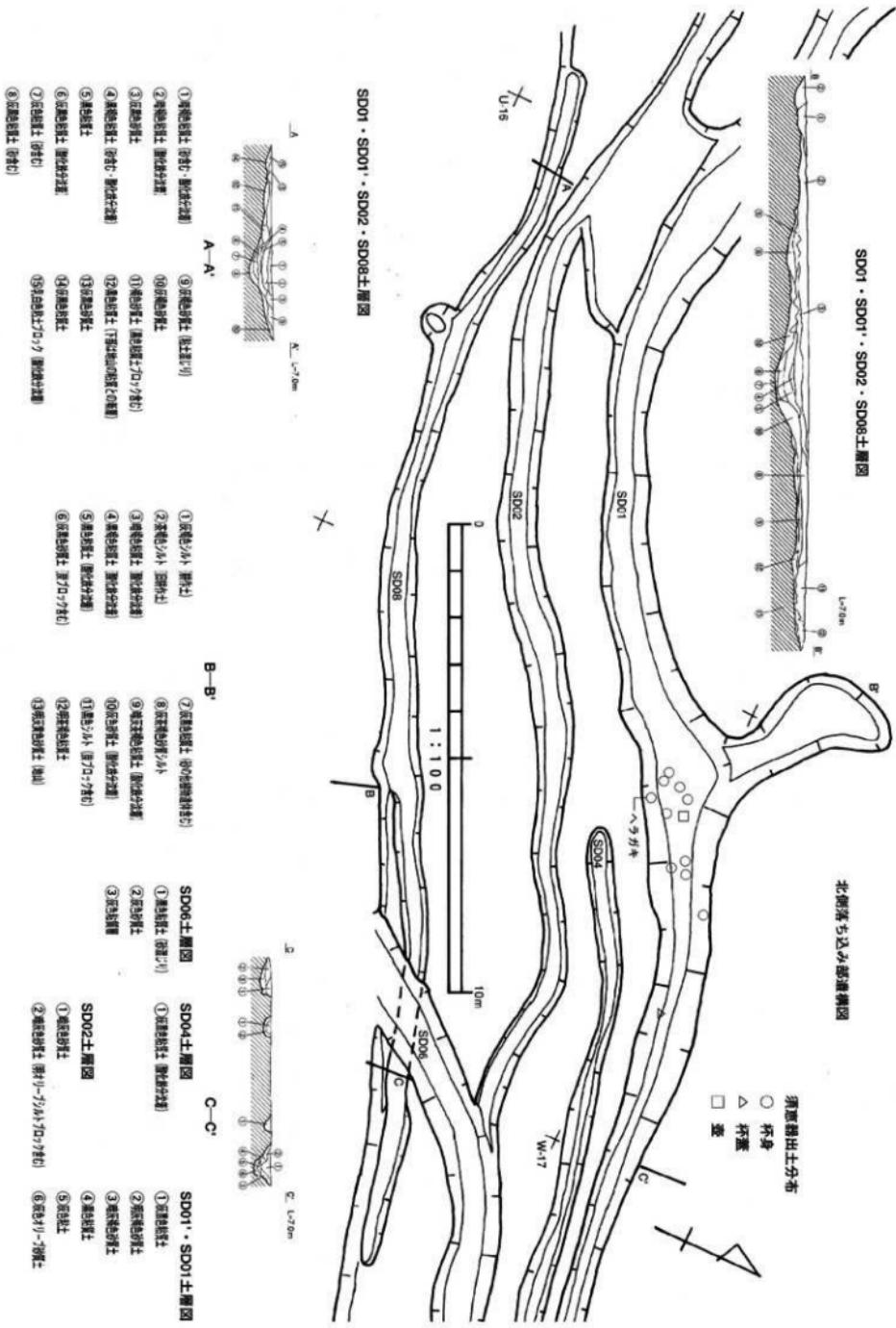
### S D03

U～W-17～18で検出された溝。幅は1.0m～1.5m。深さ20～50cmで北から南のS D01の方へ傾斜して合流している。覆土は黒色粘質土である。遺物は出土しなかった。

SD01・SD01'・SD02・SD08土層図

北側落ち込み部造構図

須惠器出土分布



#### S D 04

V～Y-16～18で検出された溝。幅は30～90cm。深さは20～25cm。覆土は黒色粘質土。遺物は須恵器片が出土している。

#### S D 06

R～W-12～17で検出した溝。幅は20～50cm。深さは5～40cm。覆土は黒色粘質土ではあるが、北側落ち込み部のそれよりはややバサついたもの。S D 06の灰褐色粘質土を切っている。遺物は須恵器片が出土しており、自然堆積によって埋没した弥生末期の溝を奈良・平安期に掘りなおしていることが窺える。S D 02と北側落ち込み部へ入ったところで合流する。

#### S D 07

W～Y-16～17で検出した溝。S D 02と06が合流した溝。幅は50～100cm。深さは20～30cm。北側落ち込み部を流れる溝全体にいえることであるが、発掘区の東壁に近くなるほど砂混じりの土質になり、かつ水を含んで軟弱な層になっており、溝の形にしても検出しづらかった。S D 07からはちょうどその部分にあたり、S D 07とS D 07の区別は困難である。遺物は赤彩の器台及び高杯と思われる部片が出土している。S D 06の続きのS D 07の遺物と思われる。覆土は灰黒色粘質土と砂が混じり合ったもの。

#### S D 08

T～X-16～17で検出された溝。北側落ち込み部の南端に沿って流れる。幅は20～70cm。深さは5～10cm。覆土は暗褐色シルト質土に灰黒色砂質土が混じり合ったもの。遺物は上師質と思われる小片が2片出土しただけであった。

#### S D 09・S D 11

V～W-15～17で検出した溝。検出時はS D 09とS D 11はS D 06のなかで直角に曲がって、つながっていた。幅はS D 09で70cm前後、S D 11で20cm前後。深さはS D 09で20cm前後、S D 11で5～10cmである。覆土は褐色粘質シルトである。遺物は両溝とも出土しなかった。

#### S D 10

U～V-14～16で検出された溝。幅は90～150cm。深さは5～10cmほど。溝の南端ではS D 06に切られており、幅、深さからみても上部が大きく削平されていると見られる。覆土はややシルト質の灰黒色粘質土。遺物は出土しなかった。

#### S K 01

X～Y-17～19で検出した土塹。径1.7m前後を測る。深さは40cmほど。底部はややスリ鉢状になっている。覆土は単層でブロック混じりの黒色粘質土が入り、埋め戻されたものである。遺物は須恵器の杯蓋片が出土している。

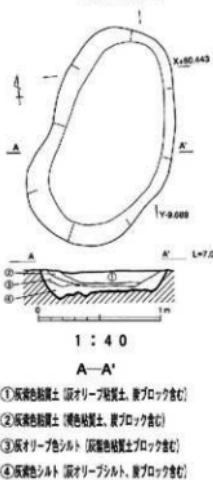
### SK02

T～U-15～16で検出された土壌。径は南北で1.9m、東西で1.8mで円形に近い。深さは50cm程。底部はややシリ鉱土になっている。覆土は単層で保湿度の弱い黒色粘質土に褐色粘質シルトブロック、灰紫色粘質シルトブロック、炭ブロックが混じったもの。遺物はいずれも小さく碎かれた土師片が多く、他に表面を磨いた礫が2点、底の方から出土した。

### SK04

W～X-16～17で検出された土壌。南北に長軸をとり1.9m、東西に短径90cmの楕円形に近い形である。北はゆるやかに南へ傾斜して底となっているが、その他は垂直にちかい急傾斜の落ち込みである。深度は25～30cm。覆土は4層に分かれ、焼土と思われる灰紫のシルト質土や炭ブロックをいずれも含む。遺物は小片に割れた土師の部品片がほとんどで、2、3点須恵器片のなかに杯蓋の部片もある。灰紫のシルト質土は西側ピット群なかでS P042, S P047, S P048, S P065, S P077, S P078, S P079, S P080, S P081, S P089, S P096, S P101, S P141, S K05の覆土に見られ、ある程度範囲を特定できる位置に点在する。

SK04実測図



### SK05

W～X-15～16で検出された土壌。径1.0m内外のはば円形に近い。壁は急傾斜に立っており、深さは20～25cmで底は平らなものである。覆土はややシルト質がかった灰黑色粘質土に灰紫シルトブロックが入る。遺物は出土しなかった。

### SK06

W～X-15～16で検出された土壌。長径1.0m、短径45cmの楕円形で、深さは15～20cm。覆土は単層で赤褐色の酸化鉄分の沈着した乳白色の粘質土や灰黒色の粘質土がブロック状に混じり合って入っている。ピットが複数、複合した可能性がある。S K06辺りから南へは砂混じりの軟弱なものとなっている。したがって造構の残存状態がよくない。遺物は土師の小片と須恵器杯部片である。

### SK07

W～X-14～15で検出された土壌。長径2.3m、短径90cmの楕円形。深さは10～15cm。覆土は単層で灰黒色粘質土であるが、やや擾乱をうけている。遺物は出土しなかった。

#### SK08

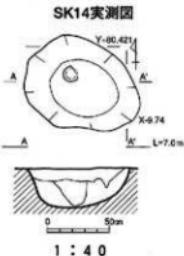
R～S-15～16で検出された土壤。覆土は現代耕作土であって遺物もみられない。

#### SK10

T～U-13～14で検出された土壤。径1.0m前後の円形に近い形。深さは25～35cm。東西に削平を受けているところの肩にかかる部分にあって、南半分は北半分より5～10cm低く削られている。覆土は灰黒色粘質土である。遺物は須恵器杯身片や同じく須恵器の同心円当て文および格子状叩き文のついた体部片、その他土師の細片が出土している。

#### SK14

T～U-14～15で検出された土壤。長径1.0m、短径75cm、深さ45cm。覆土は大きく2つに分かれ、上層は灰黒色の粘質土層である。下層は地山の灰オーリーブ色シルトもしくは細粒砂に灰黒色粘質土のブロックが入る土である。この遺構の埋土を掘る過程で2層の上面から杯の破片と土師器甕が出土し、さらに底の方から須恵器杯身が出土した。杯身は体部が少し欠けているだけで完形に近い。杯身の底部外面には文字が墨で書かれていた。いわゆる墨書き土器である。



1 : 40

#### 北側落ち込み部

遺構ではないが特徴的な地形であるので記しておく。T～Y-16～18で確認している。東に向かうにつれ、やや深くなっている、深さは15～40cmほどである。覆土は旧耕作土が入っていたがSD01周辺では遺物包含層である黒色粘質土が地山直上で遺存しており、奈良・平安時代の遺物を多量に包含していた。

## 1. 遺物について

### (1)弥生時代（図版1、2、写真図版8、11）

#### S D 01'

1はソロバン玉状の胴部をもつ壺である。口径は14.6cm。器高は20.6cm。口縁先端は強いナデによって狭い口縁帯をつくる。外面全体にハケ調整を施す。内面には頸部まで黒く、有機物が炭化したような痕跡が残る。

2は壺の口縁部片。狭い口縁帯をもつ。口縁部・体部外面にハケ調整、内面にヘラケズリを施す。

#### S D 06'

3は2層から出土の壺で、復元口径は18.2cm。狭い口縁帯をつくる。擬凹線文は施さない。体部外面にハケ、内面にヘラケズリ調整を施す。

4は高杯または器台の杯部である。復元口径は10.6cm。胎土は精良で体部内外面とも滑らかなヘラミガキを施す。

#### S D 07'

5は壺で、幅の狭い有段口縁をもつ。擬凹線文はなく、口縁部外面にハケ後ナデを、体部外面にはハケ調整を施す。

6は高杯もしくは器台であろう。煤が付着する外面にはハケ調整を施す。

7は高杯型のミニチュア土器と考えられる。内外面全てに赤彩を施す。

#### S D 13

8は壺の口縁部片で、有段口縁には擬凹線文を施さない。口縁部外面にはナデを施し、胴部外面にはハケ調整、内面にはヘラケズリを施す。

9は高杯、もしくは器台の口縁部片で、器面は摩滅しているが、わずかに赤彩が残る。

#### S D 14

10は大型の壺の口縁である。口縁部下端にははっきりとした稜が残る。器面は風化によるヒビ割れ、摩滅が目立つが、口縁外面には赤彩がみられる。

11は復元口径18.0cmの壺で、幅の狭い口縁部には擬凹線文を施している。体部内面はヘラケズリを施すが、内面はヘラミガキである。

12は壺である。復元口径は19.4cm。口縁部が短く立ち上がって狭い口縁帯をつくり、擬凹線文を施す。体部外面には斜位ハケ調整を、内面にはヘラケズリを施す。

13は有段口縁をもつ壺で、復元口径15.4cm。有段口縁部には擬凹線文を施す。

14は有段口縁部に擬凹線文を施した壺で、口縁下部に鋭い稜をもつ。

15は高杯の杯部片、復元口径31.8cm。内外面に赤彩、ヘラミガキを施す。

16は高杯の杯部片で、15と同一個体のものである。

17は高杯の脚の部片で、ヘラミガキを施す。

18は器台の脚部片で、四方にスカシ孔をもつ。内外面とも赤彩、ヘラミガキを施す。

19は高杯の脚部片で、器面はかなり摩滅しており、斜位ヘラミガキ、赤彩が残る。

20は高杯の脚の裾部片で、外面にヘラミガキを施し、赤彩が残る。

#### SK 03

21は幅の狭い有段口縁をもつもので、器面は摩滅している。擬凹線文は見えない。

22は有段口縁をもつ壺の口縁部片である。

#### SK 11

23は有段口縁をもつ鉢形土器。胎土は精良で内外面ともヘラミガキの滑らかな器面を呈する。

24は小型の壺か鉢の口縁部片。口縁部は内湾気味に立ち上る。

25は壺で、復元底径1.8cm。体部外面はハケ、内面には輻方向にヘラケズリを施す。

#### SK 12

26は狭い口縁帯をつくる壺で、復元口径は14.0cm。口縁先端でやや内湾して薄く仕上げる。体部内面はヘラケズリ、外面は斜位ハケ調整を施す。

27は有段口縁をもつ壺で、口径は16.0cm。口縁部の内外及び頸部の内面に赤彩を施す。

28は壺の口縁部片で、復元口径16.6cm。口縁部は急な角度で外反して伸び、先端部は強いナデによって狭い口縁帯をつくる。いわゆる能登壺と思われる。

29は壺で、復元口径は19.4cm。幅の狭い口縁部には擬凹線文は施さない。胴部は斜位ハケ調整の後、連續した刻み目文を、内面にはヘラケズリを施す。

30は高杯もしくは器台の浅い杯部片である。復元口径は16.9cm。内外面とも赤彩が残る。

31は高杯もしくは器台の浅い杯部片である。復元口径は21.8cm。内面に赤彩が残る。

### S K 13

32は壺で、口縁部が短く立ち上り狭い口縁帯をつくる。復元口径19.0cm。擬凹線文を施している、全体に器面の剥離、摩滅が目立つ。

33は壺の口縁部片で、狭い口縁帯をつくる。擬凹線文はわずかに残る。器面の剥離、摩滅が著しい。

34は高杯の脚部で、脚部高10.9cm。底部径は15.2cm。外面はヘラミガキで赤彩が残る。

### S P 160

35は有段口縁をもつ壺の口縁部片。

### 北側落ち込み部

36は小型有段口縁壺である。口径は11.6cm。器高は13.1cm。球を押しつぶしたような形で最大径は胴部中程より上にある。外面全部と内面の口縁部分に赤彩が施されている。

(2)奈良・平安時代(図版3, 4、写真図版9, 10, 11)

### S B 3

37はS P 056からの出土の須恵器で、無台杯身片。

38はS P 077からの出土の土師質土器で、口縁部片。先端部が内湾する。

39はS P 089からの出土で須恵器で、有台杯身片。

40はS P 099からの出土の須恵器で、無台杯身片。

41はS P 078から出土の須恵器で、無台杯身片。

42はS P 078からの出土の須恵器で、有台杯身片。

#### S K 04

43は須恵器の無台杯身。復元口径は13.6cm。器高3.5cm。

#### S K 10

44は須恵器の無台杯身片。

#### S K 14

45は須恵器の無台杯身。口径は11.4cm。器高は2.9cm。

46は須恵器の有台杯身。口径は13.1cm。器高は4.1cm。底部外間に「龍口首」の墨書がある。

47は土師質土器の鍋もしくは甕である。胴部最大径15.4cm。底は平底で径6.0cm。器肉は3mmから5mmほどで薄い。体部内面は底から下部分まではカキ目、外面はカキ目後、下半分はハラケズリを施す。

#### S D 01

48は須恵器の杯蓋。復元口径18.0cm。器高2.0cm。

49は須恵器の無台杯身。口径12.0cm。器高2.6cm。

50は須恵器の無台杯身。口径11.8cm。器高3.7cm。

51は須恵器の無台杯身。口径12.0cm。器高3.8cm。

52は須恵器の無台杯身。口径12.6cm。器高3.2cm。

53は須恵器の無台杯身。口径12.8cm。器高3.8cm。

54は須恵器の無台杯身。口径12.8cm。器高3.6cm。

55は須恵器の無台杯身。口径13.0cm。器高3.6cm。

56は須恵器の無台杯身。底径9.2cm。

57は須恵器の無台杯身。復元口径13.2cm。器高3.9cm。

58は須恵器の無台杯身。口径12.8cm。器高3.7cm。

59は須恵器の無台杯身。口径13.6cm。器高3.9cm。

60は須恵器の無台杯身。口径13.8cm。器高3.5cm。

61は須恵器の無台杯身。口径13.8cm。器高3.6cm。

62は須恵器の無台杯身。口径13.6cm。器高3.6cm。

63は須恵器の有台杯身片。

64は須恵器の有台杯身。口径11.7cm。器高3.5cm。

65は須恵器の有台杯身。口径13.8cm。器高3.9cm。底部外面に「+」状のヘラ記号が陰刻されている。

66は須恵器の有台杯身。口径14.2cm。器高4.1cm。

67は須恵器の壺蓋で、擬宝珠状のつまみをもつ。体部が外反し、口縁先端部で更に外反して丸くおさめる。つまみを除いて外面全体に自然釉がかかる。

68は須恵器の短頸壺蓋で、半分に欠けたもの。復元口径14.0cm。器高1.2cm。擬宝珠状のつまみをもち、口縁先端部は内に斜めに折れ曲がる。外面に自然釉がかかる。

69は須恵器の短頸壺で、口縁から肩にかけての部分。復元口径は6.6cm。

70は須恵器の短頸壺。口径9.2cm。器高15.1cm。断面台形の高台をもち、肩部と胴部上位に各々2条の沈線を施文する。

71は須恵器の有台杯身部片。

#### 北側落ち込み部

72は須恵器の杯蓋の部片。つまみは粗雑な擬宝珠。

73は須恵器の杯蓋の半分欠けたもの。復元口径15.4cm。器高2.4cm。擬宝珠状のつまみをもち、口縁先

端部は断面三角形を呈する。

74は須恵器の杯蓋の完形品。口径15.4cm。器高2.0cm。擬宝珠状のつまみをもち、口縁先端は断面三角形を呈する。

75は須恵器の杯蓋で半分に欠けたもの。口縁先端部は内湾して丸くおさめる。

76は須恵器の杯蓋の部片。復元口径16.6cm。口縁先端部は内湾して丸くおさめる。

77は須恵器の無台杯身。口径10.6cm。器高3.7cm。

78は須恵器の無台杯身。径11.9cm。器高3.0cm。

79は須恵器の無台杯身。口径11.9cm。器高3.7cm。

80は須恵器の無台杯身の部片。復元口径12.0cm。

81は須恵器の無台杯身。口径12.6cm。器高3.3cm。

82は須恵器の無台杯身の部片。器高3.4cm。

83は須恵器の無台杯身。口径12.1cm。器高3.5cm。

84は須恵器の無台杯身の部片。復元口径13.0cm。器高3.7cm。無台杯ではあるが一旦成形された高台が押し潰されて底面に一体化している。

85は須恵器の無台杯身。口径12.6cm。器高3.7cm。

86は須恵器の無台杯身。口径12.8cm。器高3.9cm。

87は須恵器の無台杯身。口径12.8cm。器高3.1cm。

88は須恵器の無台杯身。口径13.0cm。器高4.1cm。

89は須恵器の無台杯身。口径13.3cm。器高3.4cm。

90は須恵器の無台杯身。口径13.3cm。器高3.7cm。

91は須恵器の無台杯身の部片。復元口径13.8cm。器高3.6cm。

92は須恵器の無台杯身部片。復元口径13.8cm。器高4.2cm。

93は須恵器の有台杯身。口径14.2cm。器高3.9cm。

94は須恵器の有台杯身。口径14.2cm。器高4.1cm。

95は須恵器の無台杯身の部片。復元口径14.4cm。器高3.8cm。

96は須恵器の有台杯身。口径11.9cm。器高3.3cm。

97は須恵器の有台杯身の部片。復元口径12.0cm。器高3.5cm。

98は須恵器の有台杯身。口径13.2cm。器高3.9cm。

99は須恵器の有台杯身。復元口径13.6cm。器高4.6cm。

100は須恵器の有台杯身の部片。

101は須恵器の有台杯身。口径15.0cm。器高4.2cm。

102は須恵器の短頸壺で全体の3分の2ほどに欠けたものである。口径11.8cm。器高20.6cm。胴部の高い位置に最大径がある。調整は体部外面は擬格子状の叩きを施し、上半部はナデ消しである。体部内面は下半分は同心円当て具痕が残り、上半分はナデ消しになっている。

#### IVまとめ

調査区全体は大きく3つの区域に分けられる。いずれも人的な削平および流失を受けていることが考えられるが、もともとの地形的な高低差と関連して造構として残り、その性格や時代的特徴が表れているように考えられる。

まず、いちばん削平を受け、遂に高かったであろう中央微高地には奈良時代以降のものと思われる建物跡が検出され、そこからやや地山のレベルの下がった南端では弥生末期のものと思われるドーナツ状の溝、及

び、その内側に高まりのある遺構が検出され、また、北側落ち込み部や調査区北壁との間の元の地形の起伏が残っている区域からは奈良時代から平安中期頃までの須恵器が出土するなど、標高7m前後のレベルの所々において遺構として異なる顔を見せている。

なかでも最も特徴的に見られるのは弥生末期の遺構、遺物であり、古代の溝及び、北側落ち込み部下層から遺構、遺物が出土し、さらに、ほとんど弥生の堆積層の残っていない中央微高地からも一部、その遺物や遺構が検出されている。つまり弥生末期の遺構、遺物は調査区の全体に及んでいる。このことは調査区全体を斜めに大きく縦断する弥生の溝及び、隣接区や調査区の南東の広範囲に及ぶ試掘調査による弥生中期～末期の集落跡の存在を考える上でその広範囲な関連、結びつきが想像される。

層位的には弥生の上には奈良時代以降の古代の層が重なっており、場所的には調査区の北半分に特徴的に残っている。中央微高地では東のピット群において古代の建物跡が検出され、西のピット群では時期的にやや前後するものの同時代のものと思われる建物跡が検出された。両者の建物遺構としてのちがいは、東側の覆土からは土器や炭化物や焼土などの生活の臭いを感じさせるものに対し、西側からはほとんど出土遺物がなかったことからそのことを感じさせないものである。また西側建物遺構の柱穴のひとつは弥生の溝の覆土を掘って造られており、建物と弥生の溝との隔たりを示す。

中央微高地の北側、弥生の溝が合流する北側落ち込み部では特に北の縁を流れているSD06の溝周辺から古代の須恵器の出土が多く、さらに、その北の調査区でいちばん元の地形が残っていると思われる北壁に近いところでは先に述べたように平安中期の須恵器も出土し、古代の遺跡としての息の長さを窺わせる。

調査区の弥生の溝を挟んで西の建物遺構の南東側の土壤から杯にかかれた墨書き土器が出土したが、古代の遺物は弥生とは対照に北の大島町地区の荒烟、北高木遺跡等で多く出土しているので、今後、その方面との関連、影響をもあわせて考えていく必要があるかもしれない。

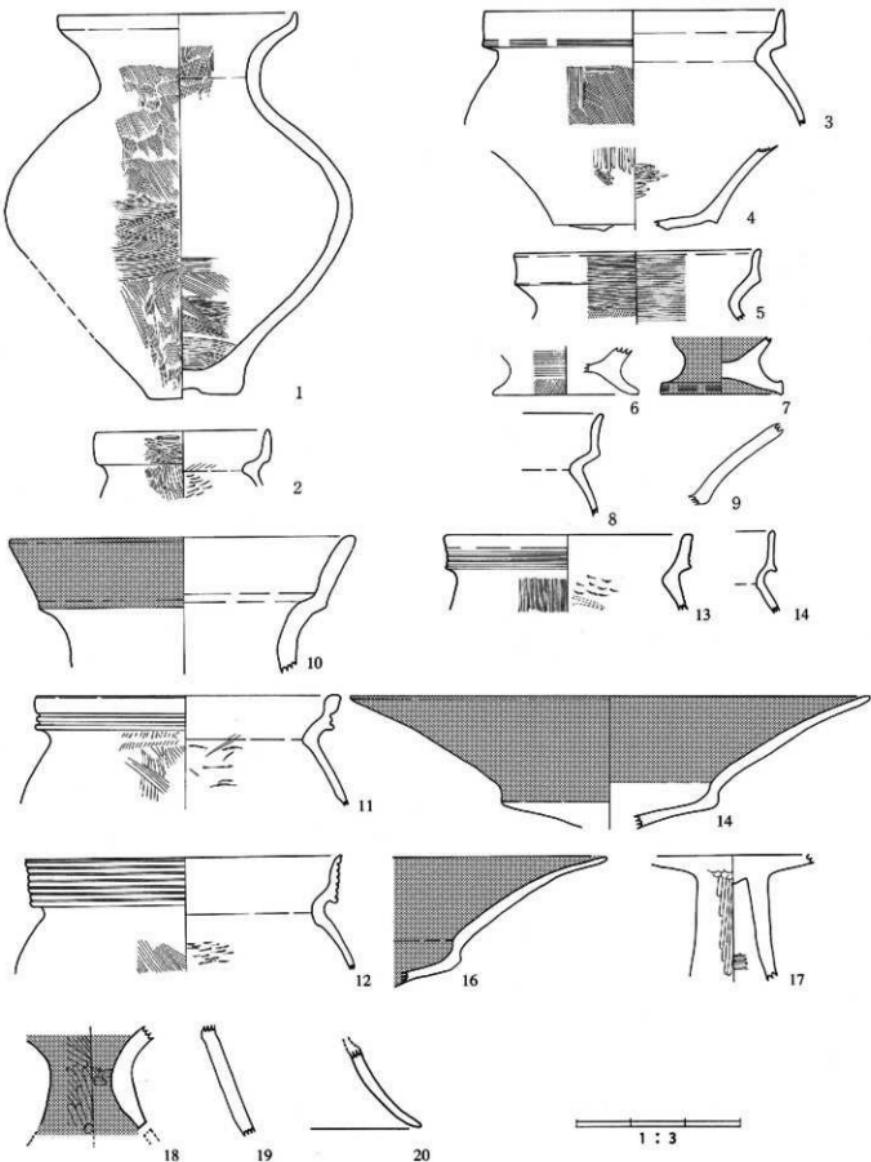
## 参考文献

- ・財団法人大阪市文化財協会 1996 「長原遺跡発掘報告書 VI」
- ・財団法人富山県文化振興財團・富山県埋蔵文化財調査事務所 1998 「富山考古学研究 別刊号」
- ・富山県大島町 1989 「大島町史」
- ・富山県大島町教育委員会 1991 「富山県大島町荒烟遺跡発掘調査概要」
- ・富山県大島町教育委員会 1998 「八塚C遺跡発掘調査報告書」
- ・富山県高岡市教育委員会 1997 「市内遺跡調査概報 VI」
- ・富山県大門町 1981 「大門町史」
- ・富山県大門町教育委員会 1994 「鶴田新遺跡 VII」
- ・富山県大門町教育委員会 1997 「大門東部地区埋蔵文化財発掘報告」
- ・富山県大門町教育委員会 1998 「富山県大門町「口油免遺跡Ⅱ次発掘調査概報」」
- ・富山県埋蔵文化財センター・大門町教育委員会 1992 「大門企業団地内遺跡発掘報告書2」
- ・北陸古代土器研究会 1993 「北陸古代土器研究 3号」
- ・北陸古代土器研究会 1994 「北陸古代土器研究 4号」
- ・北陸古代土器研究会 1995 「北陸古代土器研究 5号」
- ・北陸古代土器研究会 1997 「北陸古代土器研究 6号」

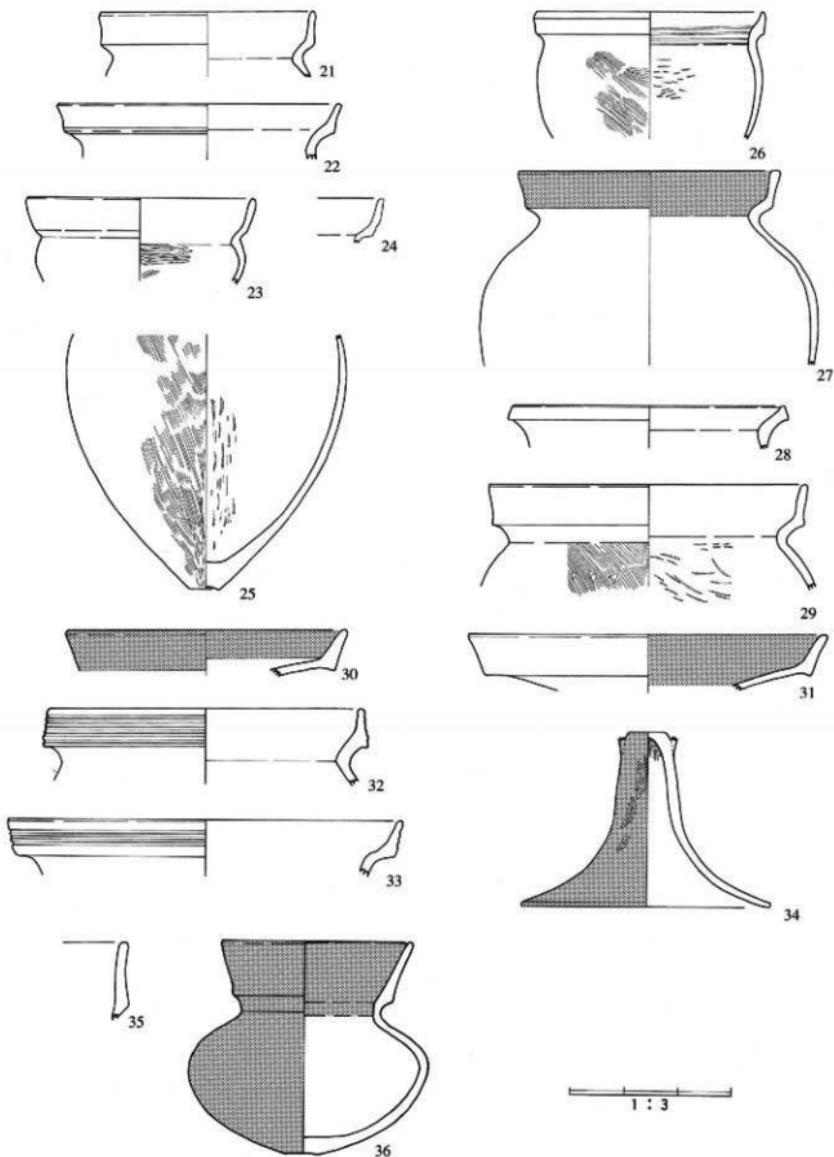
図 版  
写 真 図 版



弥生時代の遺物

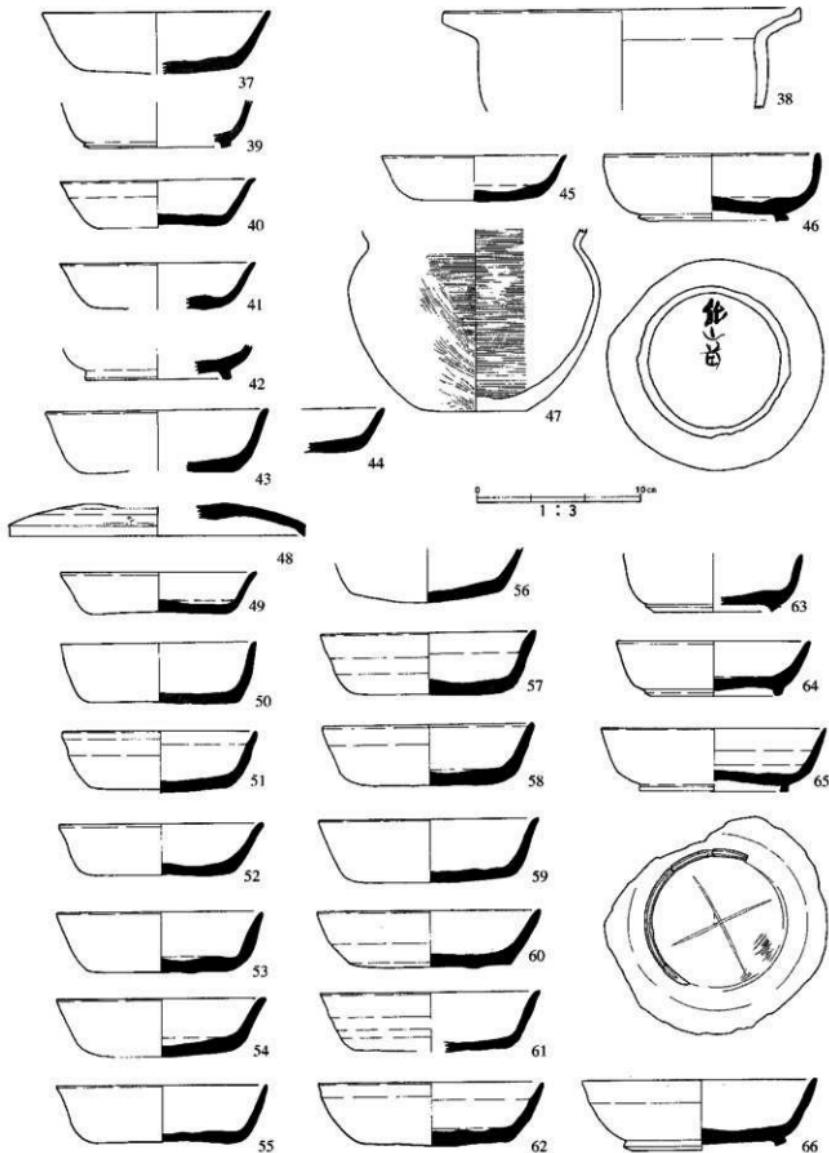


図版1

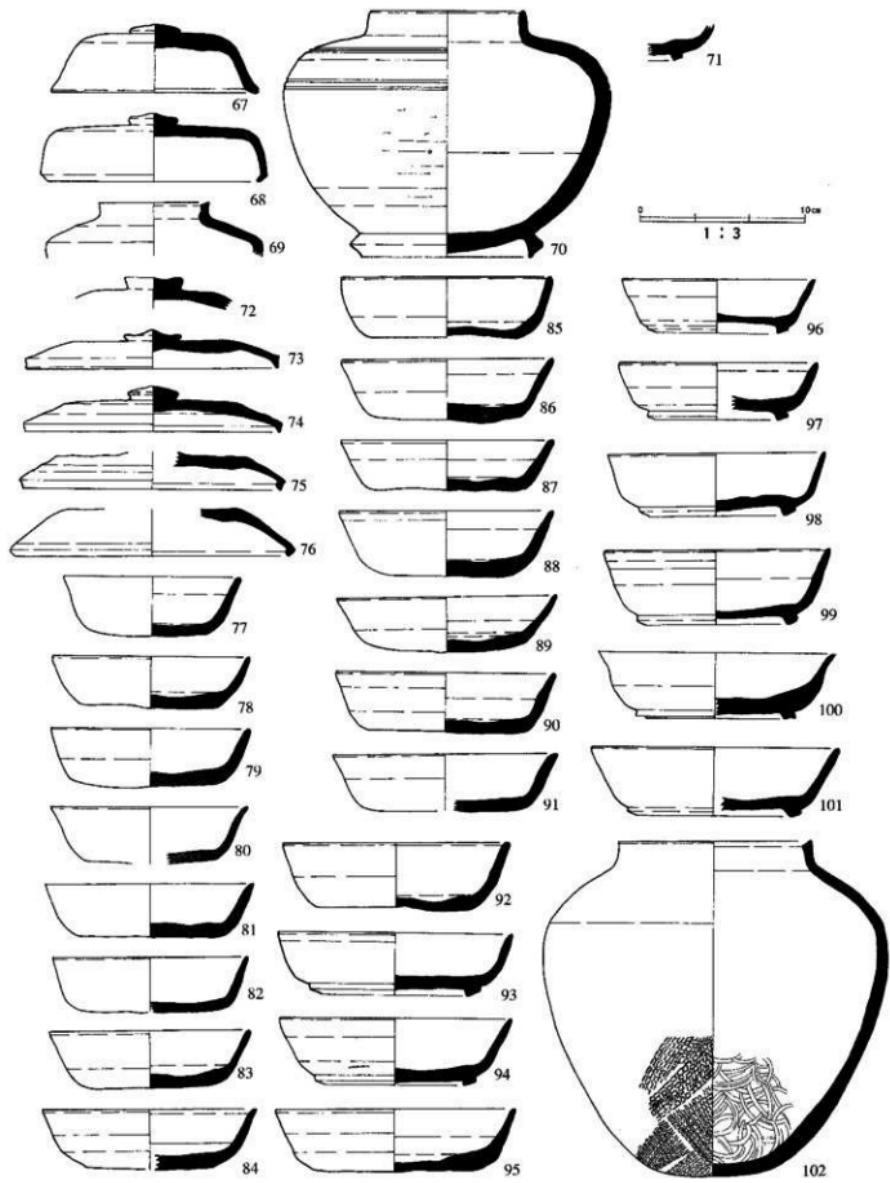


圖版 2

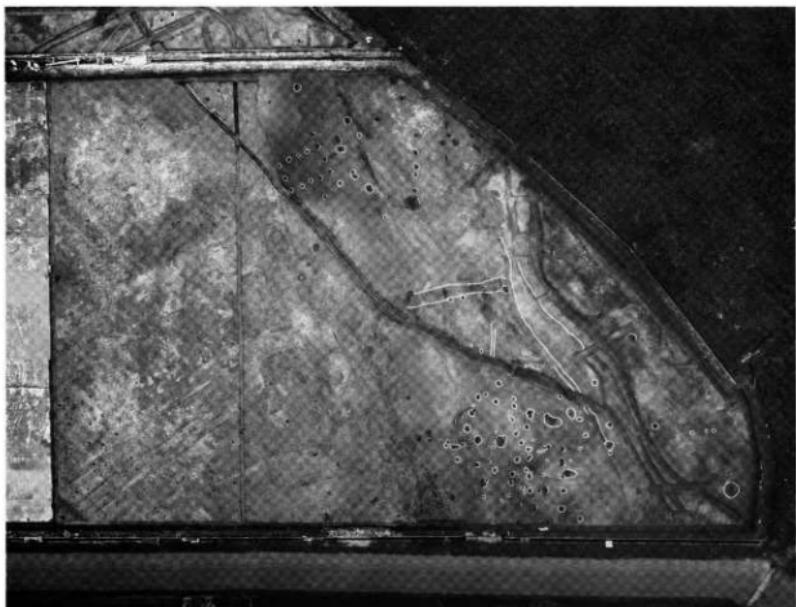
奈良・平安時代の遺物



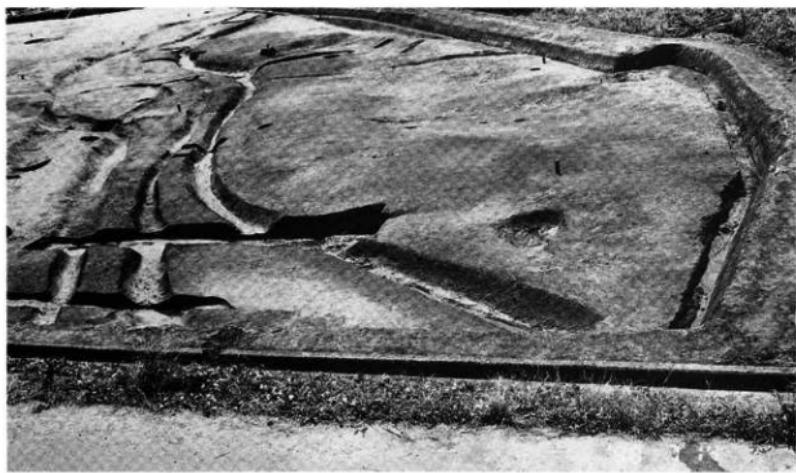
図版 3



図版 4



調査区全体（空中写真）



北側落ち込み部（東より）

写真図版1



北側落ち込み部土層断面（南より）



南側遺構（西より）



中央微高地東側ビット群（南より）

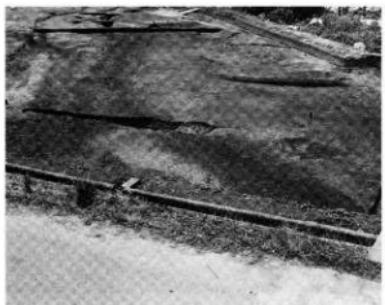


南側遺構検出面（西より）



中央微高地西側ビット群（南より）

写真図版2



北側落ち込み部遺構検出面（東より）



S B 1（北より）



北側落ち込み部西側（東より）

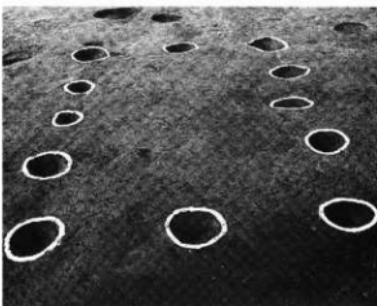


S P 044断面及び柱根（南より）



S D 06とS D 02合流部分（東より）

写真図版 3



S B 2（南より）



SD06北部分(北東より)



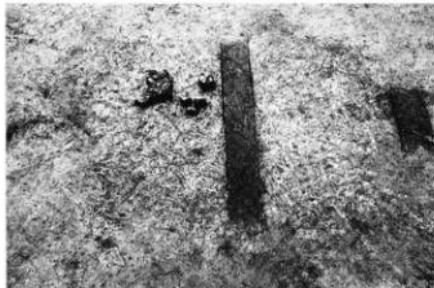
SK03(東より)



SK07(南より)



SD06南部分(北東より)



SK13(南より)

写真図版 4



S D10 (南より)



S K04 (南より)



S K03 (南より)



S D13 (南より)

#### 遺物の出土状況



S D01 (南より)



S D01 (南より)



S D01 (東より)



S K11 (東より)



S D01 (東より)



S D04 (東より)



S D01 (西より)



S D07 (東より)



S D01 (東より)



S D06 (南より)

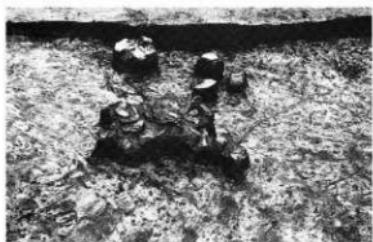


S D08 (東より)



S D06 (南より)

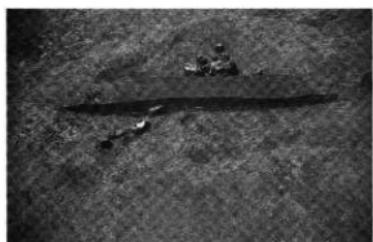
写真図版 6



SK13 (西より)



SD14 (西より)



SK12 (南より)



SK14 (南より)



SK14 (南より)

② SK14、半堀(壺出土)

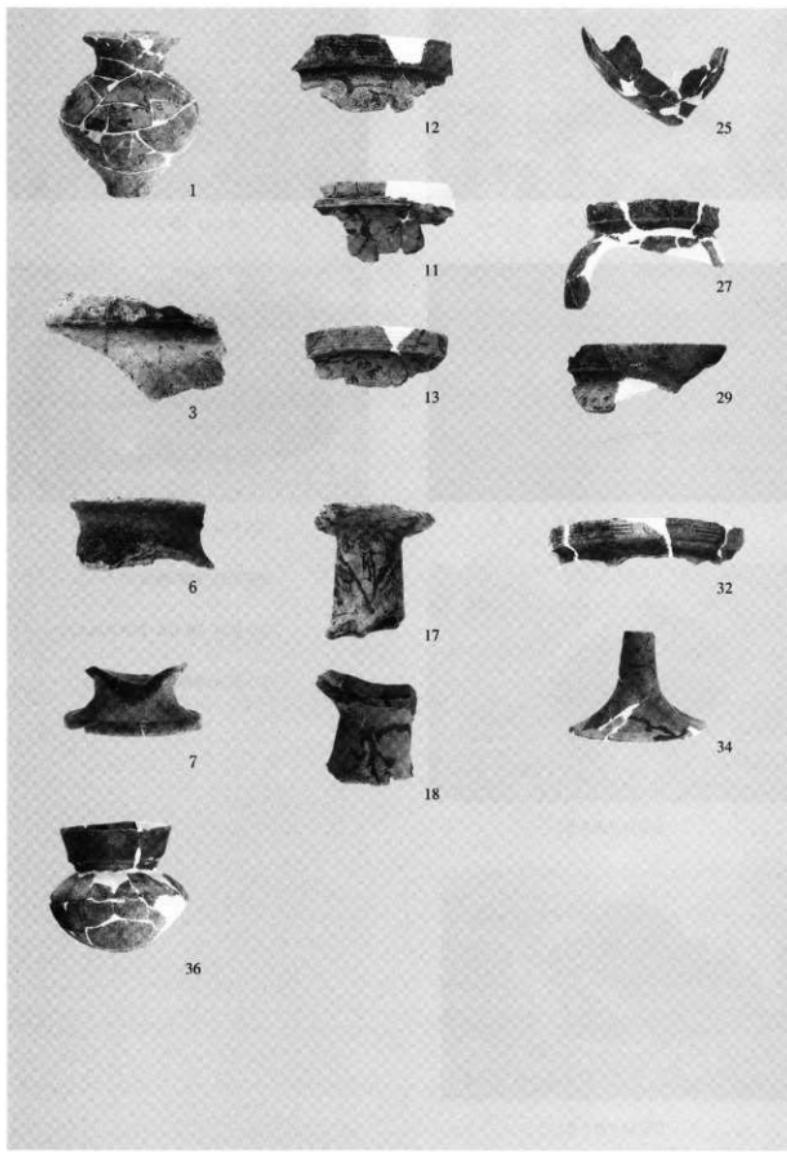
③ SK14 2層上面(杯身片出土)

④ SK14、全堀(墨書き器出土)



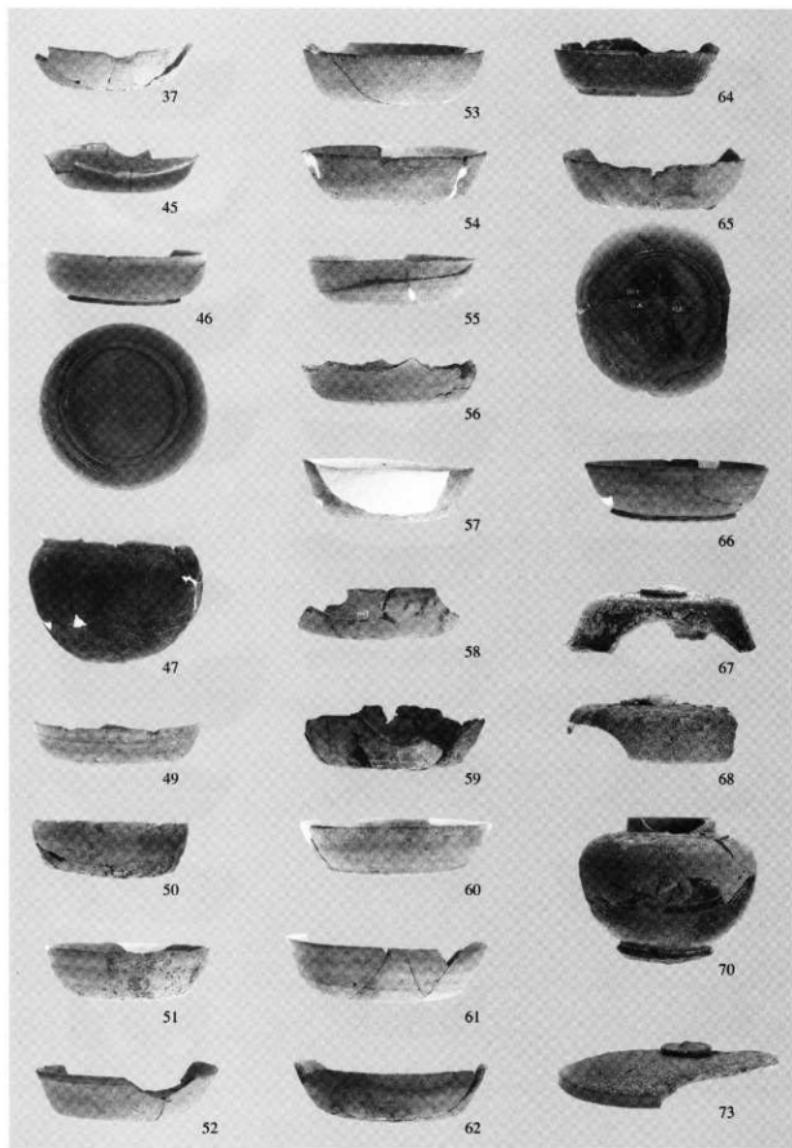
SK14 (南より)

弥生時代の遺物

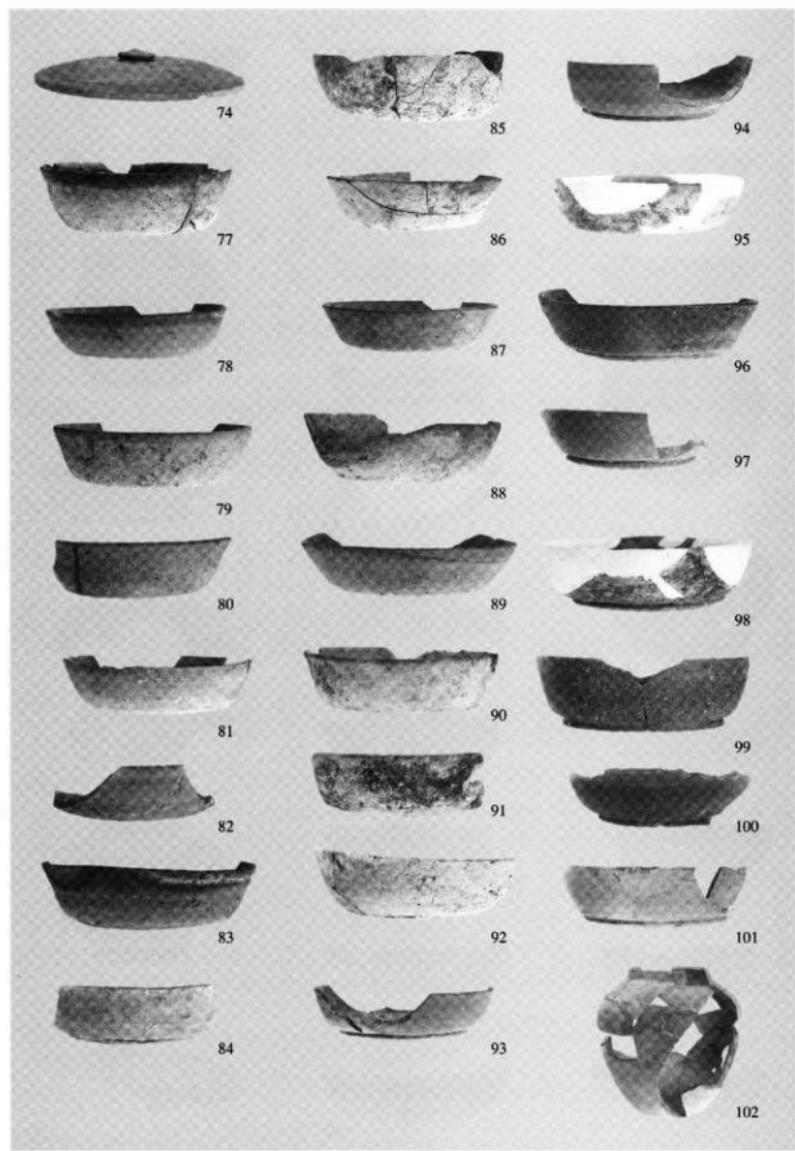


写真図版 8

奈良・平安時代の遺物

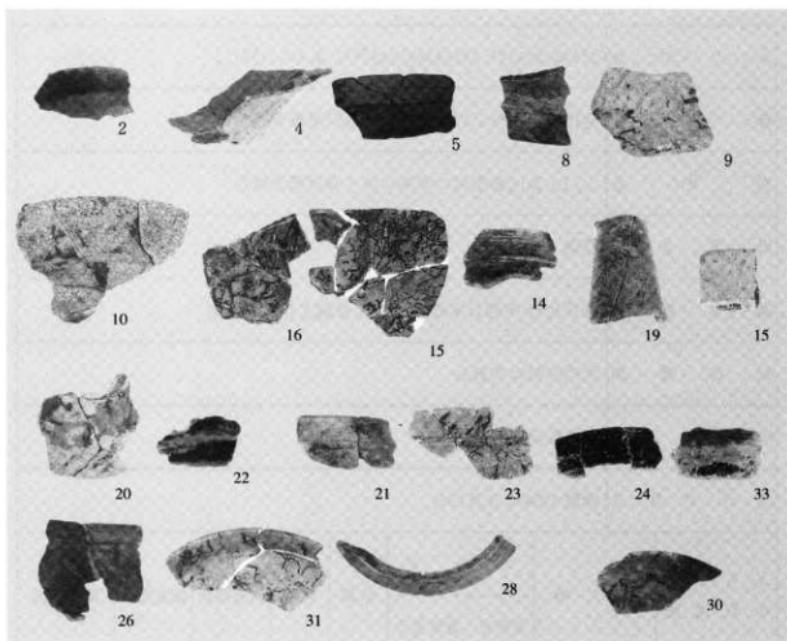


写真図版 9

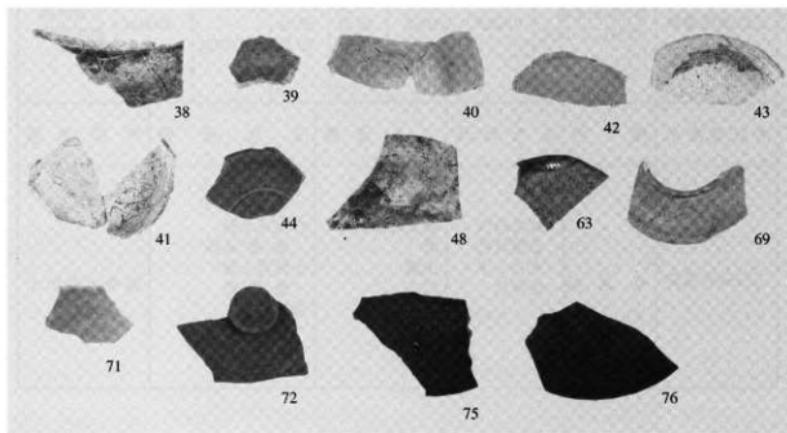


写真図版 10

弥生時代の遺物



奈良・平安時代の遺物



写真図版 11

## 抄 錄

ふりがな	とせけん たいもんち ふくらあらわいせきがくはくつちうさむぐ							
書名	富山県大門町二口油免遺跡B地区発掘調査報告							
圖書名	二口土地区画整理に事業に伴う発掘調査報告							
編著者名	真鍋 治							
編集機関	株式会社 中部日本歴史研究所 埋蔵文化財調査室							
監修機関	大門町教育委員会							
所在地	富山県高岡市利屋町9							
発行年月日	西暦1999年3月15日							
ふりがな 所取遺跡	所在地	コード 市町村 遺跡番号	北緯 東經	調査期間	調査面積 m <sup>2</sup>	調査原因		
ふたくちぬがらめいせき 二口油免遺跡	富山県射水郡 大門町二口油免	016202 202142	36度 43分 30秒	137度 03分 29秒 ~ 19980601 19981021	3500m <sup>2</sup>	上地区画 整理事業		
所取遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
二口油免遺跡	集落跡	弥生時代 古墳時代 奈良・平安時代	塙立柱建物 溝 土壤穴	弥生式土器 壺 高杯 土師質土器 壺 鉢 須恵器 杯 壺	墨書き出土上			

Archaeological Report  
of  
Futakuchi Aburamen Site B Area in Daimon Town, Japan  
A Report of an Excavation Prior to the Developement of the Futakuchi Area

富山县大門町二口油免遺跡B地区発掘調査報告  
(二口土地区画整理事業に伴う発掘調査報告)  
発行日 1999年3月15日

編集・発行  
監修  
印刷  
株中部日本鉱業研究所  
大門町教育委員会  
株小岡印刷

